

東京・春・音楽祭 2021



## 川口成彦 (フォルテピアノ) ～協奏曲の夕べ

ピリオド楽器で聴くモーツァルト&ベートーヴェン

### 曲目解説

#### モーツァルト：J.C.バッハのソナタによる協奏曲 第2番 ト長調 K.107-2

作品リストでは27曲の番号付きのピアノ協奏曲を書いているモーツァルトだが、第4番までは他者の作品の編曲であり、このト長調協奏曲も若い頃に多大な影響を受けたヨハン・クリスティアン・バッハのピアノ・ソナタの編曲となっている。

モーツァルトの死後に発見された未発表作品で、3曲をまとめてK.107の作品番号が与えられ、ブライトコプフ・ウント・ヘルテルの「旧モーツァルト全集」で初めて出版された。

編成はピアノ、ヴァイオリン2、チェロと極めてシンプル。第1楽章アレグロと、第2楽章アレグレットからなる。

#### モーツァルト：ピアノ協奏曲 第12番 イ長調 K.414

ウィーンに居を定めたモーツァルトは、フリーの音楽家として独自に収入を得るため、予約演奏会を催すようになった。本作は、そのためにまとめて作曲された3曲（ピアノ協奏曲第11～13番）の真ん中の作品だが、時期的にはもっとも早く完成されていたという。

楽器編成も最小で、弦楽4部の他にオーボエ、ホルンが各2。家庭向けの楽譜出版も考慮され、弦楽四重奏のみによる伴奏もできるようになっている。

第1楽章は優美なアレグロのソナタ形式。第2楽章はアンダンテのソナタ形式。1782年1月に亡くなった敬愛するヨハン・クリスチャン・バッハを偲ぶため、同楽章の第2主題は、クリスティアンの歌劇《心の磁石》から採られたとされる。第3楽章アレグレットは軽快なロンド形式で、人気絶頂だった頃のモーツァルトの典雅な調べがフィナーレを飾る。

#### C.P.E.バッハ：幻想曲 へ長調 Wq.59-5

クラヴィーアの名手と謳われたエマヌエル・バッハは、同時代の学習者のために『正しいクラヴィーア奏法についての試論』第1部・第2部を残した。多感様式の時代に生きたエマヌエルがこだわったのが「ファンタジー（幻想曲）」という様式。それは「あいまいな拍節分割」と「過剰なまでの転調」という2つの要素からなる。緩急、強弱の極端なデュナーミクも、自身の技巧を際立たせるために意図されたもので、エマヌエルの名人芸を彷彿とさせる。

#### ベートーヴェン：ピアノ協奏曲 第2番 変ロ長調 op.19

作曲に着手したのは17歳の頃だったにもかかわらず、出版したときには30歳を過ぎていた

(初演は 1795 年)。ベートーヴェンの逡巡を表すかのように、初稿 (1790 年)、第 2 稿 (1793 年)、第 3 稿 (1795 年)、第 4 稿 (1798 年) と、4 度にわたって改訂され、ようやく 1801 年に決定稿 (第 4 稿) が出版された。

編成はフルート 1、オーボエ 2、ファゴット 2、ホルン 2 と弦楽 5 部。第 1 楽章は、アレグロ・コン・ブリオのソナタ形式。第 2 楽章アダージョは、変奏曲形式の緩徐楽章。第 3 楽章は、モルト・アレグロのロンド形式。いわゆる「ため息」の音型で綴られていく第 2 楽章に象徴されるように、楽曲全体がハイドンやモーツァルト時代のロココ趣味に溢れている。室内楽版で聴くと、そうした典雅な趣がいつそう明らかになる。